連載 第8回

われらが街の 誘致企業

株式会社大林デザインパートナーズ 弘前事務所

誘致企業の中には、専門分野でITを活用した業務を行っている企業もあります。

今回は、建築分野において最先端のIT技術を応用した設計サポートにより、全国各地のさまざまな大型物件のプロジェクトに携わっている企業を紹介します。

■問い合わせ先　産業育成課（☎32-8106）

▼**本社**　東京都港区
▼**所在地**　下白銀町
▼**従業員数**　11人（全社員92人）
▼**事業開始**　2013（平成25）年
▼**主な業務**　IT（情報技術）を活用した設計に関する各種図面の作成
▼**会社概要（沿革）**

企業理念

「　ともに考え、ともに創り、ともに喜ぶ　」

私たち大林デザインパートナーズ（ODP）は、大林組で培った技術を礎に2009年に設立されました。設計者の「考える」「伝える」行為の中で、「伝える」ことについて、IT技術を活用し発信する技術者集団です。

2次元の図面を作成する「CAD」、3次元の図面モデルを作成する「BIM」、提案書・プレゼン資料を作成する「DTP」、建築物の日当たりを確保する日影計画、避難安全検証などの課題をITの力で解決する「PS」、高品質で印象深いビジュアル表現を作成する「CG」の5部門があり、幅広い技術分野でサービスをしています。

「お客様とともに、社会とともに、そして地域環境とともにある」を念頭に、2020年に新しい“企業理念”を制定しました。弘前市でも弘前城改築工事をはじめ、弘前れんが倉庫美術館などさまざまなプロジェクトに参画し、弘前市の発展に貢献しています。

◀ **弘前城本丸石垣修理**
石垣の調査や図面の作成などに携わりました。また、2017年と2018年の夏に行われた石垣修理体験イベントではスタッフとして参加しました。

©Naoya Hatakeyama

◀ **弘前れんが倉庫美術館**
最先端のIT技術を用いて、既存の建物の調査から、元の状態を活かした改修用の図面の作成まで、あらゆる工程に携わりました。

働く人からひと言！

▲山形 菜奈江さん（2020年入社）

私は学生時代に建築を学んでいたため、建築関係の仕事を志し、企業見学を経て入社に至りました。新型コロナウイルスの流行により、大林組本社での新人研修も例年とは違い、リモート形式で行われました。初めは慣れないテレワークでのリモート研修でコミュニケーションをとることが難しく、仕事を始めるにあたり、わからないことがあっても質問できる環境があるのか不安でしたが、出社後は先輩方が優しく丁寧に教えてくれるので、安心して仕事に取り組めています。ただ単純に図面を作図するだけではなく、提案資料の作成など、さまざまな方面から建築設計をサポートする仕事なので、とてもやりがいを感じています。

当社ではITを駆使した遠隔での作業が可能なため、弘前に住みながら全国各地の大型建築や海外プロジェクトに関わることができます。実際、私もベトナム事務所と仕事をする機会があり、作業内容を英語で会話しながら実演しました。今後はさらにBIM技術や現地スタッフとのコミュニケーション能力を高め、海外プロジェクトにもたくさん挑戦したいと考えています。

高岡の森歴史だより

高岡の森弘前藩歴史館より、展示資料や歴史ネタを毎月紹介します。

■**問い合わせ先**　高岡の森弘前藩歴史館（☎83-3110）

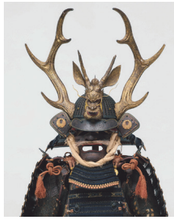
第1回　津軽信政着用具足（つがるのぶまさちゃくようぐそく）

当館を訪れたことのある人は、第1室目に立派な鎧兜（よろいかぶと）が展示されていることに気が付いたかと思います。弘前藩4代藩主・津軽信政が着用した具足で、信政が祭神として祀（まつ）られた高照（たかてる）神社に大切に伝えられてきました。この具足は製作から300年以上を経て劣化が進んでいることから、本物は収蔵庫で大切に保管し、普段はレプリカを展示しています。本物ではないとはいえ、鎧兜の複製製作で確かな実績と技術を持った専門業者が製作したので、本物と見間違えるほどの出来栄えです。

兜の前立（まえたて）と呼ばれる部分には龍の頭が、脇立（わきたて）には鹿の角があるのが目を引きます。鎧兜は鉄や革製の板を紐でとじ付けて作られますが、とじ付けることを「威（おど）す」と言い、紐の色によって「〈色〉糸威（いとおどし）」などと呼ばれます。

深い藍色、濃い紺色は「褐色」と書き、「かちいろ」と読みます。藍で濃く染め上げる際、棒でつつくことを「搗（か）つ」ということから名付けられた色です。縁起を担いで「勝」を願った武士たちに「かちいろ」が好まれ、この具足にも採用されています。

4月9日からの「武具甲冑展」（本誌18ページ掲載）では、300年の時を経た本物を展示しますので、ぜひご覧ください。



本物

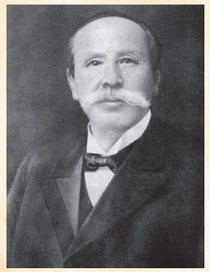
レプリカ

弘前の偉人たち

第13回　東奥に生まれた日本の国士 本多庸一（1848-1912）

市教育委員会が発刊している「新・弘前人物志」から、弘前が生んだ偉人たちを毎月紹介します。皆さんが知らなかった偉人と出会えるかもしれません。

■**問い合わせ先**　教育センター（☎26-4803）



庸一（よういつ）は、弘前藩士の家の長男として在府町に生まれました。先祖は2代藩主・津軽信枚（のぶひら）に嫁入りした徳川家康の養女、満天姫（まてひめ）に随行して弘前藩に来た家康の家臣でした。

藩校の稽古館（けいこかん）に入学した庸一は、10歳の頃には論語などの難しい書物を全て暗唱できるほど聡明でした。後に英語を学ぶため、横浜の宣教師ブラウン夫人の塾に入り、キリスト教と出会って洗礼を受けます。そして25歳のとき、優れた教師でもあった宣教師ジョン・イングを伴い、東奥義塾の塾長に赴任し、弘前に先進的な教育をもたらしました。教育とキリスト教伝道に力を注ぎ、1876（明治9）年に弘前教会を創立した一方、自由民権運動にも関わり、県会議長として政治でも手腕を発揮しました。しかし大日本帝国憲法発布後は、宗教家と代議士は兼任できないため、伝道に生涯をささげることを決意。その後、青山学院長に就任して63歳で亡くなるまで全国各地を伝道して回りました。庸一は、菊池九郎とともに「青森県における明治維新の二偉人」と呼ばれています。

※菊池九郎は本誌の令和2年7月1日号の「弘前の偉人たち」で紹介しています。

弘前が生んだ傑出した人物を紹介した「弘前人物志」は、1982（昭和57）年に初めて発刊されました。人物を詳しく知りたい人は、「新・弘前人物志」をご覧ください。